

ケルト語の特異性

北 村 一 親

Les Particularités des langues celtiques

Kazuchika KITAMURA

1. 序

1. 1. ケルト語の分布

ケルト語は概略的に言えばイギリスのウェールズとスコットランド(島嶼部を含む)、アイルランド、フランスのブルターニュ、そしてこれらの地方から移入したアメリカ大陸(例えばアルゼンチンのパタゴニアやカナダのノヴァ・スコシア)などに分布する。さらに一度は死滅の危機に瀕したが an Dasserghyans Kernewek と呼ばれる復活運動により再生したイギリス・コーンウォールのコーンウォール語があり、1967年11月には Kesva an Tavas Kernewek が創設された。¹⁾

アイルランドにおいてアイルランド語が日常言語として使われているのは主に北西および南西の沿岸部で、州名で言えば Dún na nGall (Donegal), Maigh Eo (Mayo), Gaillimh (Galway) の大部分と Ciarrai (Kerry), Corcaigh (Cork), Port Láirge (Waterford), Mí (Meath) の一部分である。1971年の調査では54,940人がアイルランド語を話している。²⁾ 1948年に大幅な正書法の改革が行なわれて綴字と発音の合致が図られた。

1) ただし Kesva an Tavas Kernewek の方針声明の第6条には次のようにある。

“The Board believes that the object of the revival of Cornish should be to make it readily available as an optional second language for those Cornish people who want it. It does not aim at seeing Cornish replace English as first language of the Cornish people.” (Ellis (1974: 200).)

2) Stephens (1978: 444).

旧綴字	新綴字
claidhim	cloim
buidheachas	bufochas
laetheamhail	laethúil
naomhtha	naofa
tosnughadh	tosnú

スコットランドとその島嶼部においてスコットランド・ゲール語が話されているのはハイランド北西部と西側の島々で、1971年の調査では88,892人が理解可能であり、1961年からの10年間で9.77%増加している。³⁾

ブリテン島とアイルランド島の間にあるアイリッシュ海に浮かぶマン島においてもかつてはケルト語が日常的に用いられていた。最後の native speaker の Ned Maddrell は1974年12月27日に没した。⁴⁾ しかし現在、200～300人の人々が第二言語としてマンクス・ゲール語を話している。⁵⁾

ブリテン島のウェールズで話されているウェールズ語はケルト語圏で最も勢力のある言語であり、Sir Forgannwg (Glamorgan), Sir Gaerfyrddin (Carmarthenshire), Sir Gaernarfon (Caernarfonshire), Sir Ddinbych (Denbighshire), Sir Fôn (Anglesey), Sir Aber-teifi (Cardiganshire) などに分布する。しかし1971年の調査でウェールズ語を理解することができる人口は542,402人であるが、⁶⁾ そのほとんどは英語との二言語併用者であるという。⁷⁾ 次の例は英語を直訳にしたウェールズ語であり⁸⁾、二言語併用の様子が憂慮される。

Sut mae popeth yn mynd?

'How's everything going?'

現在のウェールズ語は Cymraeg Byw と呼ばれる口語体を基本としたもので文語とはかなり異なっている。⁹⁾ 次に示す例は上段が現用口語ウェールズ語、下段が文語ウェールズ語である。

3) MacKinnon (1978: 5).

4) Broderick (1984: I, xv).

5) Stephens (1974: 103).

6) *Ibid.*, p. 145.

7) 水谷 (1976a: 19).

8) 水谷 (1980: 17).

9) この点に関しては R. M. Jones (1974), (1978) を参照されたい。

Rydw i'n mynd allan.

Yr wyf fi yn mynd allan.

'I am going out.'

Mae e'n gweithio.

Y mae ef yn gweithio.

'He is working.'

Dydyn nhw ddim yma.

Nid ydynt hwy ddim yma.

'They are not here.'

Mae hi eisiau llyfr.

Y mae eisiau llyfr arni hi.

'She wants a book.'

フランスのブルターニュ半島の Breizh Izel では約 385,650 人がブルトン語を日常用いている。¹⁰⁾ Le Gonidec が 1908 年に Léon の方言を基礎にして綴字法を作成して以来、他の方言をも包括する改革が行なわれ、1941 年に統一した綴字法が定められた。¹¹⁾

ブリテン島のコーンウォール半島のコーンウォール語は最後の native speaker である Dolly Pentreath が 1777 年に没して単一言語使用者がいなくなったが、¹²⁾ その後もコーンウォール語を理解する人々が復興運動、すなわち an Dasserghyans Kernewek がすすめられた。¹³⁾

1.2. ケルト語の分類

前節で述べたケルト語は地理的観点から「島嶼ケルト語」と称され、後に述べる「大陸ケルト語」と相対する。大陸側にありながらブルトン語が島嶼ケルト語に分類されているのは、この言語が後の時代にブリテン島から移入されたためである。¹⁴⁾

島嶼ケルト語は印欧祖語の labio-velar**k* が *p* となる p-Celtic (ウェールズ語、ブルト

10) Stephens(1978: 363).

11) 原 (1982: 36-37).

12) 吉岡 (1972: 8).

13) An Dasserghyans Kernewek については Parry (1946) 参照。

14) Falc'hun (1963) はこの通説に反対しているが、その詳細については別の機会に譲ることにする。

ン語, コーンウォール語) と q となる q-Celtic (アイルランド語, スコットランド・ゲール語, マンクス・ゲール語) に分けられる。また前者をブリタニック (Britannic; ローマ時代の属州 Britannia に由来。¹⁵⁾), 後者をゴイデリック (Goedelic; アイルランドの原住民を GoIdel と表わしたことに由来。¹⁶⁾) と呼ぶ。先述の p-Celtic と q-Celtic の例を示しておく。

OIr. cethair 'four', *LEIA*, C-86-87. Ir. ceathair. ScG. ceithir. ManxG. ke:ə, Broderick (1984: I, 47).

OW. petguar, *LEIA*, C-87. W. pedwar. OBr. petguar, *DGVB*, 284b; *VVB*, 202-03. MBr. peuar, *DGVB*, 284b. Br. pevar. C. peswar.

PIE. *k^wetwer-, *k^wetur-, *k^wetr-.

ちなみにマンクス・ゲール語はスコットランド・ゲール語と著しく近い関係にあり, 例えば名詞の複数語尾が ManxG.-yn, ScG.-an であるのに対し Ir.-anna である。¹⁷⁾

次に大陸ケルト語について述べる前に古代のケルト人について言及しておく必要がある。というのも大陸ケルト語というのは紀元後数百年で死滅した言語だからである。後期青銅器時代のヨーロッパにおいてアルプス山脈の北で火葬が行なわれ始め, その際に遺骨を壺に入れる, いわゆる骨壺葬文化の時代に突入した。この民族がケルト人の源流と考えられる。そしてこの文化はヨーロッパの中部から西部にかけて伝播してハルシュタット文化と称される鉄器文明に続いてゆくのである。ギリシャの著述家が彼らを *Κελτοὶ* と呼んでいた時代である。さらにケルト人はエトルリア人と接触を始めラ・テーヌ文化の隆盛へと続く。¹⁸⁾ そして一部はブリテン島やアイルランド島へ渡っていったのである。

古くケルト語はヨーロッパ全土に拡大していた。ガリア, イタリアを中心に西はイベリア半島から東はバルカン半島を経て小アジアまで及んでいた。これは地名にも残っておりイベリア半島北西の Galicia 地方, ポーランドの Galicja 地方の名称は Caesar が "Gallia est omnis diuisa in partes tres, quarum unam incolunt Belgae, aliam Aquitani, tertiam qui ipsorum lingua Celtae, nostra Galli appellantur. Hi omnes lingua institutis legibus inter se differunt." (*De Bello Gallico*) と記述した Gallia¹⁹⁾ や 3 世紀の小アジアの *Γαλάται* と語源を同じくする。

15) Thurneysen (1909: 2).

16) *Ibid.*, p. 1.

17) O'Rahilly (1976: 129).

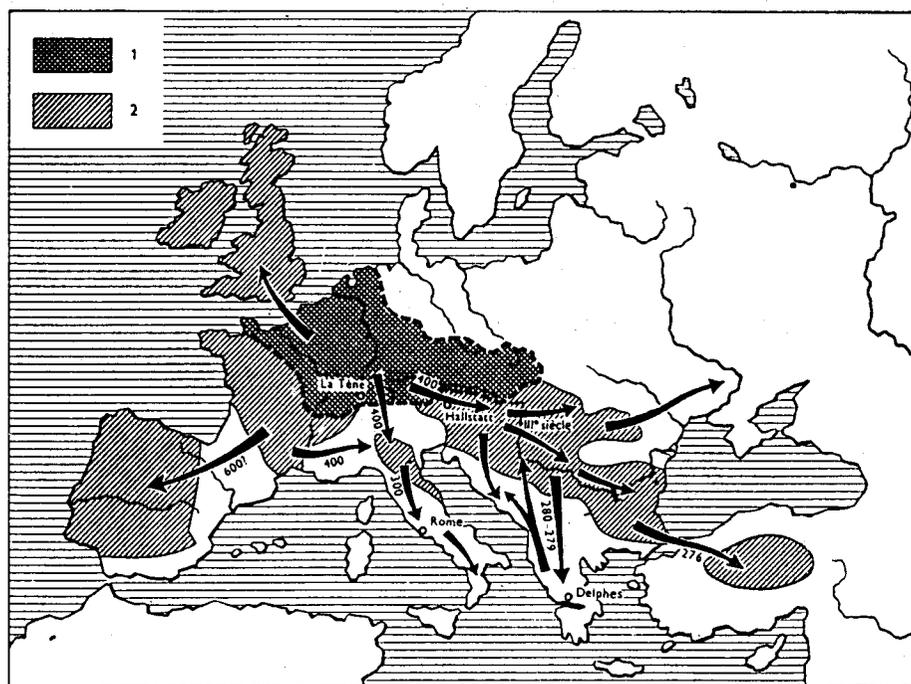
18) ハルシュタット文化期のケルト人については Hubert (1974) を, またラ・テーヌ文化期以後のケルト人については Hubert (1950) を参照されたい。

19) Whatmough (1970) 所収の "Κελτικά" の "II. Introductory" を参照。

大陸ケルト語の中で最も資料が多く残っているのはガリア語である。まとまった資料としては Ain 県の Coligny から出土した通称 Coligny カレンダーと言われる青銅板断片や Aveyron 県の La Graufesenque で出土した陶器破片がある。²⁰⁾ Ulrich Schmoll によるとイベリア半島では、かつて南部にいたケルト人の他に中部から東部にかけてケルト・イベリア人と呼ばれたケルト系の民族がおり、²¹⁾ 数量的にはあまり多くはないが大陸ケルト語の貴重な資料のひとつである。

先に述べた印欧祖語の labio-velar *k^w はガリア語では p になるが、ケルト・イベリア語では k になると言われている。²²⁾

- Gal. Petrucorii, 'the four armies', Whatmough (1970: 402a); Dottin (1918: 90).
 <PIE *k^wetur-.
- Cl. Ce, 'and', Lejeune (1955: B8, P7); -cue, Hoz & Michelena (1974: 40-41),
 <PIE *k^we.



ケルト人の移住
 Szabó (1971: 8)

20) Coligny カレンダーについては蛭沼(1984)を、La Graufesenque の陶片については Vendryes (1925)を参照されたい。
 21) Schmoll (1959). またケルト・イベリア人の考古学的研究については Burillo Mozota et al. (eds.) (1988)を参照されたい。
 22) Schmidt (1977: 16); Tovar (1961: 78).

しかしガリア語において *k* > q も Coligny カレンダーに見られる。

equos, Whatmough (1970: 227); Dottin (1918: 98, n. 2), <PIE*ekwo-s.

この p-Celtic 的な面と q-Celtic 的な面の併存が何を意味するのかという問題は言語資料が限られていることもあってなかなか結論が出しにくいであろう。ガリア語における方言的差異であるのか、または他の言語からの借用であるのか、あらゆる可能性を考える必要がある。

古代イタリアにおける大陸ケルト語については若干の碑文やグロースが残っているが、東ヨーロッパでは地名・民族名・人名といった資料に限られる。²³⁾

1.3. ケルト語の言語学的位置

ケルト語は複雑な動詞形態や後に述べる語頭音が変化する現象のために印欧語とは一見異なった印象を受ける。例えば古アイルランド語の動詞は単独で用いられる絶対形と否定語の後や複合語の中などで用いられる連接形がある。次に 'to bring' という意味の動詞の直説法現在形の活用形を示す。²⁴⁾

絶 対 形	連 接 形
sg I ber (a) im (m)	強勢形 前接形
II beri	sg I -biur -tabur
III berid, -ith	II -bir -tab(a)ir
rel. beres (s)	III -beir -tab(a)ir
pl I berm (a) i	pl I -beram -taibrem
rel. berm (a) e	II -berid,-ith -taibrid,-ith
II *beirthe	III -berat -taibret
III ber (a) it	
rel. berd (a) e, bert (a) e	

このため Rasmus Rask ですら当初はケルト語と他の印欧語との語彙的一致を借用によるものだと考えていたのである。²⁵⁾

ケルト語はイタリック語と共通する点が多く、系統的に見て両者が印欧語の中でひとつの語派を形成するのではないかと考える学者もおり、この統一体を Italo-Celtic unity と

23) 古代イタリアの大陸ケルト語に関しては蛭沼 (1975-80) を、東ヨーロッパのハンガリーのケルト人については Szabó (1971) を参照されたい。

24) Thurneysen (1909: 336).

25) Pedersen (1972: 57).

呼ぶことがある。Antoine Meillet の説明からいくつか拾い出してみることにする。

1. -r による非人称受動態。Meillet (1977 : 22-23).
2. -r による中間受動態。Ibid., pp. 23-24. ²⁶⁾
3. -ā-, -s- による接続法。Ibid., pp. 24-26.
4. -i による属格。Ibid., pp. 26-27.
5. -to- による動詞的形容詞。Ibid., pp. 27-28.
6. 動作名詞の接尾辞 -ti- を -n- で拡張。Ibid., p. 32.
7. *-smo- による形容詞最上級の形成。Ibid., pp. 32-33.
8. *p…k* の *p* が *k* に同化。Ibid., pp. 33-34.
9. 共通の前置詞。Ibid., p. 34.
10. 共通の語彙。Ibid.

しかしこの Italo-Celtic unity 説も皮相的なものが多く、蛭沼寿雄によると -i による属格形成はレポント語、ウェネト語、メッサピア語などに見られるし、-r による受動形成もウェネト語、アルメニア語、プリュギア語、トカラ語、ヒッタイト語などに見られるのであり、²⁷⁾ また共通語彙の点でも Carl Marstrand は Italo-Celtic unity に反対している。²⁸⁾

2. ケルト語の音韻的特異性

2.1. 緩音現象

ケルト語で最も顕著な特徴はある環境において一定の語頭子音が別の異なる一定の音に変化する「緩音現象」と呼ばれるものである。語頭の子音が変化するため初学者は簡単な単語でも辞書すらひくことができないのである。次に示すのはウェールズ語における緩音現象の例である。

cath	'cat'
y gath	'the cat'
fy nghath	'my cat'
ei chath	'her cat'

26) ケルト語やイタリック語のこの -r については Lloyd-Jones (1912 : 203-06) を参照されたい。

27) 蛭沼 (1981 : 9-12).

28) Marstrand (1929).

変異をひきおこした形, 例えば nghath を辞書にあたる場合は基底形 cath の頭文字 C の項目を探さなければならない。

緩音現象はドイツ語で Lenierung または Lenition と言い, これは Rudolf Thurneysen が Holger Pedersen の用語である Aspiration の代わりに用いたものである。²⁹⁾ 緩音現象の本質を水谷宏はウェールズ語の緩音現象の一般音声学的考察から呼気の弱めに起因すると結論を下した。³⁰⁾ ブルトン語の緩音現象がウェールズ語の緩音現象の崩れ (乱れ) をも考慮に入れた場合, 筆者は水谷理論がこれらの現象を完全には説明できないであろうと考えるが, 詳細は後に述べることにする。

2.2. ケルト語の緩音現象

ブリタニック語からウェールズ語を, そしてゴイデリック語からアイルランド語を選んでケルト語の緩音現象を体系的に説明してゆくことにする。

ウェールズ語の緩音現象は軟変異 (soft mutation), 鼻変異 (nasal mutation), 帯気変異 (spirant mutation) の 3 つのレベルがある。

基底形	p	t	c	b	d	g	m	ll	rh
軟変異形	b	d	g	f	dd		f	l	r
鼻変異形	mh	nh	ngh	m	n	ng			
帯気変異形	ph	th	ch						

音声レベルでは軟変異の $p > b, t > d, c > g, ll > l, rh > r$ が有声音化, 軟変異の $b > f, dd > d, m > f$ と帯気変異の $p > ph, t > th, c > ch$ が摩擦音化, 鼻変異のすべてが鼻音化である。そして一定の統語的条件のもとでこの変異が起きる。先に示した cath の諸変異の条件を説明すると, 定冠詞 y は次にくる女性単数名詞 (cath) の語頭子音を軟変異させて $c > g$ となるため y gath という形になる。所有形容詞 fy 'my' は次にくる名詞を鼻変異させて $c > ngh$ となるため fy nghath という形になる。所有形容詞 ei は 'her' の意のときのみ次にくる名詞を帯気変異させて $c > ch$ となるため ei chath という形になる。(ei が 'his' の意のときは軟変異をひきおこして ei gath 'his cat' となる。) これらの統語的条件は数十にのぼるのである。

アイルランド語の緩音現象は従来, lenition と言われてきた変異と, eclipsis という変異がある。後者はギリシャ語起源のラテン語で本来, 月や太陽の食を意味する語である。

29) Thurneysen (1898: 43).

30) 水谷 (1971), (1976 b).

本稿では lenition の方を「帯気変異」、eclipsis の方を「弱変異」と訳しておく。そしてこの2つを合わせた全体を緩音現象 (Thurneysen の言う Lenition) と呼ぶことにする。アイルランド語の緩音現象は次のようになる。

基底形	p	t	c	b	d	g	f	s	m
帯気変異形	ph	th	ch	bh	dh	gh	fh	sh	mh
弱変異形	bp	dt	gc	mb	nd	ng	bhf		

帯気変異はすべて摩擦音化であり、弱変異のうち $p > bp$, $t > dt$, $c > gc$, $f > bhf$ は有声音化であり、 $b > mb$, $d > nd$, $g > ng$ は鼻音化である。実際には例えば bean ‘woman’ という女性単数名詞の前に定冠詞 an が付けば bean は帯気変異して an bhean ‘the woman’ となり、ceart ‘right’ は所有形容詞 ár ‘our’ が付くと弱変異して ár gceart ‘our right’ となるなどウェールズ語と同じように多くの緩音現象をひきおこす規則がある。

ちなみに古いアイルランド語の頭韻詩ではこれらの緩音現象が生じていても基底形に還元して頭韻をふむ。よって c は ch と、t は th と韻をなす。³¹⁾

前節の最後に少し言及した緩音現象の本質に関する問題であるが、ブルトン語ではウェールズ語やアイルランド語にない硬変異という有声子音の無声化の緩音現象がある。一例をあげると buoc’h ‘cow’ は硬変異では ho puoc’h ‘your cow’ というように $b > p$ の無声化が生じる。これは水谷説の呼気の弱めには該当しないのである。また緩音現象が発音の最小努力に向かうものならば何故ウェールズ語の緩音現象の崩れ、すなわち変異しなければならぬ場合でも変異させずに基底形を使うということが起こるのか。筆者はケルト語の緩音現象とは音声レベルで把握するものではないと考える。それははるか昔、単純に音声レベルの同化であったものがその後固定化してしまった現象なのである。日本語で春雨をハルサメ、三位をサンミと発音するのと同じく固定化されているのである。

3. 形態的特異性

3.1. 屈折前置詞

ケルト語の一部の前置詞はその目的語の人称と数に応じて変化するという特異性を有する。これを J. Morris Jones が inflected preposition と呼んだのにちなみ、³²⁾ 「屈折前置

31) Meyer (1909:3)

32) J. M. Jones (1955:397). ちなみに H. Pedersen は die konjugierten Präpositionen と呼んでいる。(Pedersen (1909-13:I, 149))

詞」と訳しておく。

ウェールズ語の屈折前置詞の一例として gan‘with’ の変化をあげておく。(この前置詞は所有表現のときに使うが、語形変化をするため TYLW では屈折しない同じ意味の前置詞 gyda を教えている。³³⁾)

	sg	pl
I	gen	gynnon
II	gen	gynnoch
III	m. gynno	} gynnyn
	f. gynni	

現用ウェールズ語では通時的に見て語形が変化しすぎているので文語ウェールズ語の形を次に示す。

	sg	pl
I	gennyf	gennym
II	gennyt	gennych
III	m. ganddo	} ganddynt
	f. ganddi	

この文語形を見れば屈折前置詞の起源は本来の屈折しない前置詞にその目的語であった代名詞が付いたものであると推定できる。なお3人称形に -dd- が現われるのは人為的であると J. Morris Jones は指摘している。本来の形は sg. III. m. gantho; f. genthi; pl. III. ganthunt である。³⁴⁾

次にアイルランド語の対応物 le の変化形を示しておく。

	sg	pl
I	liom	linn
II	leat	libh
III	m. leis	} leo
	f. léi	

33) TYLW, 61.

34) J. M. Jones (1955: 405).

3.2. 20進法の数詞

フランス語を学習する時、数詞に途惑う理由は70以上の数の20進法であろう。例えば79はsoixante-dix-neuf ($60 + 19$), 80はquatre-vingts (4×20), 99はquatre-vingt-dix-neuf ($4 \times 20 + 19$)である。

このフランス語の70以上の20進法はおそらくローマ人がガリアに来た時の先住民であるケルト人の数え方が伝わったものであろう。ケルト語はフランス語よりも完全な20進法を有しているのである。

ウェールズ語は現用の口語では20進法を棄てて10進法を採用している。(70 = saith deg (7×10), 80 = wyth deg (8×10), 90 = naw deg naw ($9 \times 10 + 9$))。しかしアイルランド語は20進法を保っており、ウェールズ語でも文語では20進法が見られる。

アイルランド語

- 20 fiche
- 30 deich fichead ($10 + 20$)
- 40 daichead (2×20)
- 50 deich is daichead (10 and 2×20)
- 60 trí fichid (3×20)
- 70 deich is trí fichid (10 and 3×20)
- 80 cheithre fichid (4×20)
- 90 deich is cheithre fichid (10 and 4×20)

文語ウェールズ語

- 20 ugain
- 30 deg ar hugain (10 on 20)
- 40 deugain (2×20)
- 50 deg a deugain (10 and 2×20)
- 60 trigain (3×20)
- 70 deg a thrigain (10 and 3×20)
- 80 pedwar ugain (4×20)
- 90 deg a phedwar ugain (10 and 4×20)

- e. Rydw i'n canu.
 be-1sg-PRES I in singing
 'I sing.'

アイルランド語においても基本的にはV S 構造である。

- f. Tá an fear anso.
 be-3sg-PRES the man here
 'The man is here.'

- g. Buaileann sé mé.
 strike-3sg-PRES he me
 'He strikes me.'

4.2. 対格代名詞

ウェールズ語で次の構文における対格代名詞の位置は特殊である。すなわち動名詞を所有形容詞ではさむのである。

- h. Maen nhw yn ei nabod e.
 'They know him.'
- i. Rydych chi wedi ein helpu ni.
 'You have helped us.'

5. 結 語

フランス語やスペイン語などのロマンス語や英語やドイツ語などのゲルマン語にないケルト語の特徴として所有動詞の欠如がよく問題にされる。

- W. Mae car gyda fi.
 'I have a car.'
- Ir. Tá sé ag Seán.

'John has it.'

ScG. Tha leabhar aig Màiri.

'Mary has a book.'

このように存在を表わす動詞と所有を表わす前置詞を用いて所有物を主語にして表現している。この表現法は確かに英語やフランス語にはない方法であるが他の多くの言語でふつうに見られる構文なのである。

ロシア語 У меня есть книги.

'I have books.'

フィンランド語 Minulla on kello.

'I have a watch.'

日本語 私には車がある。

上の3例はすべて存在動詞と位格的な表現とから成っている。

以上、ケルト語の特異性を見てきた。ケルト文化は我々にウイスキー (ScG. uisge 'water') をもたらしただけではない。Oisín や Deirdre を始めとするアイルランドやスコットランドの伝説、アーサー王伝説の基となった Mabinogion の物語等々の文学史の面でもヨーロッパ文化の土台の一端を形成しているのである。我が国のケルト学が他の分野に比べ遅れているのは単にケルト語自体の複雑さに原因がある。1979年4月1日に第1回日本ケルト学会議の懇親会場で Dylan Thomas が御専門の久納泰之先生と「ケルト・マニアも結構じゃないでしょうか」と、沈丁花の春のやわらかな香りの中、互いに興に入っていたあの日、思えばちょうど13年前の今日であった。(1992年4月1日記)

参考文献及び略語一覧

Br. = ブルトン語

Broderick, George (1984) *A Handbook of Late Spoken Manx*. 2 vols. Tübingen: Niemeyer.

Burillo Mozota, Francisco et al. (eds.) (1988) *Celtiberos*. Zaragoza: DPZ.

C. = コーンウォール語

CI = ケルト・イベリア語

DGVB = Léon Fleuriot (1964) *Dictionnaire des gloses en vieux breton*. Paris: Klincksieck.

Dottin, Georges (1918) *La Langue gauloise*. Paris: Klincksieck.

Ellis, P. Berresford (1974) *The Cornish Language and its Literature*. London & Boston: Routledge & Kegan Paul.

Falc'hun, François (1963) *Histoire de la langue bretonne d'après la géographie linguistique*. 2

- tomes. Paris: PUF.
- Gal. = ガリア語
- 原聖 (1982) 「ブルトン語の抑圧と擁護」『思想』697号, 27-44頁。
- 蛭沼寿雄 (1975-80) 「古代イタリアのゴール語」『ケルト研究』9-10号, 8-14頁; 11号, 7-14頁; 12号, 15-25頁; 13-14号, 31-46頁; 15号, 2-17頁。
- (1981) 「ケルト語の特徴」『ケルト研究』16号, 2-26頁。
- (1984) 「コリニー・カレンダー」『ケルト研究』18-19号, 2-8頁。
- Hoz, Javier de y Michelena, Luis (1974) *La inscripción celtibérica de Botorrita*. Salamanca: Univ. de Salamanca.
- Hubert, Henri (1950) *Les Celtes depuis l'époque de La Tène et la civilisation celtique*. Paris: Michel.
- (1974) *Les Celtes et l'expansion celtique jusqu'à l'époque de La Tène*. Paris: Michel.
- Ir. = アイルランド語
- Jones, J. Morris (1955) *A Welsh Grammar*. Oxford: Clarendon, reprinted.
- Jones, Robert Morris (1974) "Literary and Colloquial Welsh," 『ケルト研究』8号, 1-14頁。
- (1978) 「ウェールズ語の現状」(吉岡治郎訳)『ウェールズ語研究』1号, 4-19頁。
- LEIA = J. Vendryes (1959-87) *Lexique étymologique de l'irlandais ancien*. Paris: CNRS.
- Lejeune, Michel (1955) *Celtiberica*. Salamanca: Univ. de Salamanca.
- Lloyd-Jones, J. (1912) "The Development of the Verbal R-Forms," in *Miscellany Presented to Kuno Meyer*, Halle a. S.: Niemeyer, pp. 198-206.
- MacKinnon, Kenneth M. (1978) *Gaelic in Scotland 1971*. s. 1., Hatfield Polytechnic.
- ManxG. = マンクス・ゲール語
- Marstrander, Carl (1929) "De l'unité italo-celtique," *NTS*, III, 241-59.
- MBr. = 中ブルトン語
- Meillet, Antoine (1977) *Esquisse d'une histoire de la langue latine*. Paris: Klincksieck, troisième éd.
- Meyer, Kuno (1909) *A Primer of Irish Metrics*. New York: AMS, reprinted, 1984.
- 水谷宏 (1971) 「ウェールズ語における呼気の弱めについて」『名古屋学院大学論集・人文・自然科学編』8巻2号, 251-63頁。
- (1976a) 「ウェールズにおける二言語併用(1)」『ケルト研究』11号, 14-21頁。
- (1976b) 「Parametric Approach とウェールズ語の緩音現象」『蛭沼寿雄教授還暦記念論文集』尼崎, 45-60頁。
- (1980) 「ウェールズ語の口語体」『第1回日本ケルト学会議録』名古屋, 14-17頁。
- OBr. = 古ブルトン語
- OIr. = 古アイルランド語
- O'Rahilly, Thomas F. (1976) *Irish Dialects Past and Present*. Dublin: DIAS.
- OW. = 古ウェールズ語
- Parry, John J. (1946) "The Revival of Cornish," *PMLA*, 61, pp. 258-68.
- Pedersen, Holger (1909-13) *Vergleichende Grammatik der keltischen Sprachen*. 2Bde. Göttingen: Vandenhoeck&Ruprecht, Nachdruck, 1976.
- (1972) *The Discovery of Language*. (tr. by J. W. Spargo) Bloomington&London: Indiana U. P., fifth printing.
- PIE. = 印欧祖語
- ScG. = スコットランド・ゲール語
- Schmidt, Karl Horst (1977) *Die festlandkeltischen Sprachen*. Innsbruck.

- Schmoll, Ulrich (1959) *Die Sprache der vorkeltischen Indogermanen Hispaniens und das Keltiberische*. Wiesbaden: Harrassowitz.
- Stephens, Meic (1978) *Linguistic Minorities in Western Europe*. Llandysul: Gomer, second impression.
- Szabó, Miklós (1971) *Sur les traces des Celtes en Hongrie*. (tr. par É. Szilágyi) Budapest: Corvina.
- Thurneysen, Rudolf (1898) "Besprechung: H. Pedersen. Aspirationen i Irsk," *Anzeiger für indogermanische Sprach- und Altertumskunde*, IX,42-48.
- (1909) *Handbuch des Alt-Irischen*. I. Heidelberg: Winter.
- Tovar, Antonio (1961) *The Ancient Languages of Spain and Portugal*. New York: Vanni.
- TYLW=T. J. Rhys Jones (1977) *Living Welsh (Teach Yourself Books)*. London: Hodder&Stoughton.
- Vendryes, J. (1925) "Remarques sur les graffites de la Graufesenque," *BSL*, XXV, 34-43.
- VVB =J. Loth (1884) *Vocabulaire vieux-breton*. Paris: Vieweg.
- W. =ウェールズ語
- Whatmough, Joshua (1970) *The Dialects of Ancient Gaul*. Cambridge, Mass.: Harvard U. P.
- 吉岡治郎(1972)「ケルト・メモ .Dolly Pentreath 補記」『ケルト研究』2号別刷, 8頁。